ぽえ犬通信(ぽえいぬつうしん) VOL.20 世界と新世界号

野宿生活で表現したい (言いたい) 色んなこと

1998年私は否応なく野宿しなければならなかった。「釜ヶ崎反失業連絡会」の始めての市役所の前での座り込 みに参加した。その座り込みの時、個人的に「なぜ野宿しているのか」との文章や詩を拾ってきたダンボールに 書いて、野宿の仲間や通行人に見てもらった。その時スローガンとして使ったのがこんな文章だった。

「野宿者は『なまけもの』ではない いっしょうけんめい生きている」

その年末から阿倍野橋駅の軒下に寝る場所が決まった。現在は公園の中に建てた小屋に住み、たまの日雇仕事 で生活をしている。小屋の外壁面は、私の詩や野宿者ための発行物、非戦等の掲示をしている。 野宿を標榜し ているが、誇れる野宿者ではない。毎晩寝る場所を探している人の苦労を考えると、私は貴族である。何の妨げ もなく昼間から横になることができる。荷物も置けて、貰い物をとっておく事ができる。公園の便所で水をもら い、カセットコンロを使って自炊している。ちゃんとした小屋なので不自由することはない。現在の私は野宿の 弱さを感じることはない、野宿の自由な面を謳歌している。通天閣がみえる。通天閣には時計が付いているし、 天気予報だって分かる。フラミンゴがときどき飛んでくるし。なにせ環境抜群なにしろ公園なのだから。家賃も いらない一戸建。ただし公園から追い出されれば、途端に路頭に迷ってしまう。

「朝の公園 煙たなびく木切れ燃やして米を炊いている」

「役所の世話にならず仮設住宅 自分で建てる」

「撤去ごと改築増築 生活改善」

でも、野宿の自由さということはあまり言葉にはしない。哀れみの対象になるから野宿者支援があるのではな いか。そのなかで野宿を楽しんでいるとか、あまり勇ましく野宿の権利などと言っても受け入れられない。弱者 が強くものを申すと反発が出てくる社会だ。

「野宿の天敵ホモサピエンス」

「生きるために寝てる 生存権を主張します」

野宿者のことを少しでも知ってもらうことが、とっかかりになれば良いと思っている。

「風ふきぬけるけど仲間いるからここに寝る」

「横になりほっとするダンボールの我が家」

「一つづづはずかしさ消して路上に寝る」

「寒し冷たし人恋しい」

でもでも、野宿者からの視点も知ってほしい。社会の常識から解き放して考えれば、野宿者の生き方は可 能性があると思う。

「よりよい生活をめざさない生き方」

「もったいないを拾って生きる」

「省資源 資源再利用 地球にやさしい野宿者たち」

会社に縛られ、家のローンに縛られ、社会の目に縛られているあなたなどより、野宿者の方が解放されていると 思うよと書きたいけれど。

パフォーマンスで社会との関わりをつくる

私は若い時から詩を書いていた。詩集、文集などを作品発表の場としていた。ドヤに住み日雇労働していたと きは日雇労働や寄場生活をテーマに、野宿してからは野宿生活をテーマに冊子を作っている。

2004年cocoroomの「reading THE BIG ISSUE」という催しに詩の朗読とパフォーマンスをした。今まで話下手 で人前は苦手であったが、否応となく舞台にあがってしまった。年若の人に背中を押された。それからは他人の 舞台を見るようになり、好きなアーチストのライブに通うようになり、色々な関わりができ、多くの人々と交流す るようになった。今50代の私に青春が来ていると思っている。

人前で初めて詩の朗読をしたときは緊張だけで、客の顔も見えず反応も分からなかった。そのあとのパフォーマ ンスでは私の台詞忘れに笑いが起こった。私はとても感激した。その感じが、いま舞台に出たいと思う原点にな っている。

冊子を媒体とした表現を長く続けてきたが、一人よがりのものだったと思うようになった。社会生活のなかで自 分が主張できていない分、自己主張できる場として冊子を作ってきたように思う。

今、人前で詩の朗読パフォーマンスをしたいと思っている。自分を誇れる場を求めている。他人から良い評価を されたいと思っている。そんな希望があるから、発表できる場を作るために他人と関わりを作ろうとしている。 朗読パフォーマンスが私と他人との関わりを作る手立てとなっている。パフォーマンスが私と社会との関わり をつくっているといえる。でも、やっぱり人づき合いは苦手である。



http://hexageon.cool.ne.jp/ikiru/ikiru_index.htm | tatibana8@msn.com

朗読の仕事ください

大阪・天王寺公園の野宿小屋で生活しています。 主に野宿生活をテーマにした自作詩を朗読しています。 また「反戦アンデパンダン詩集」の街頭朗読も各地で行っています。 朗読する機会をお与えください。会合集会等の時間を少しおさき下さい。 時間は15~30分程度です。

連絡先 〒556-0002大阪市浪速区恵美須東3-4-36フェスティバルゲート4階cocoroom気付 tel 06-6636-1612 | fax 06-6636-1662

表現と仕事と社会。

マニフェスト大阪から

この世界は無名の働き手によって、成り立っている。

誰かが目を覚まし、眠い目をこすりながら朝ご飯を食べたり、食べなかったりして、作業をはじめ、身体を動か し汗を流し、頭を使い、書類を作成したり、怒ったり怒られたり、「ありがとう」を言われたり、言われなかったり して、「お疲れさま」を交わし、また眠り、眠っているときに誰かが起きだし、働きはじめる。そのたくさんの働 きが数珠のようにつながり、わたしたちは生きている。

昨日から今日へ。そして明日へとつづく毎日のなかで。誰でも平等に持っているもの。それは「生まれてきたこ と」と「死」だ。なぜ、この時代のこの場所に生まれたのか。その問いには答えはない。けれど、この人生を他の 誰かに変わることはできないのだから、自分なりの生きる姿勢を持ちたいと思う。親や社会のせいにするので はなく、ひとりの人間として生きる意味を考えるとき、人生の多くの時間を占める仕事について考える。仕事とは 何のために行うのか。自分のためか、家族のためか、クライアントや株主のためか。死んだ先に持っていけない お金や権力のためか。次の社会を生きることになる子どもたちのためへの、愛の行為ではないのか。

社会のなかで生きるとは、ひとりの無名の人間としてそこに存在し責任を持つ、ということだ。責任のリスクを 回避するのではく、孤立するのではなく、人と関わって生きることだ。自分の存在を楽しみながら主体的にそこ にいる。そのとき過剰な自意識が遠ざかると、結局のところ、自分は何を価値するのか、が鮮明になっていく。 起きてから眠るまで多くの時間を費やしているこの仕事が生まれてくる子どもたちへ手渡していくに足る事柄や 思想であるか、よく考えたい。同じ時代をともに生きている自分以外の人と、ともに働き、いのちの価値を確か めながら、智慧と時間を未来へ積み重ねていくことを望む。

そして、この理想が簡単に叶わないことを判っている。そのときこそ、さまざまな有り様で創造力を発揮して、新 しい視点で可能性を探りつづけるのだ。表現とは可能性への追求であり、生きる勇気となり、誰かに伝えていく ことによって、強度を持ち、響きをもって、こころをつないでいく。あまねく大地をつなぎ、ひとつの空のしたで。



上田假奈代(闘う詩人・詩業家)

1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。視覚障害者や高齢者、親子、一般社会人、中高生対象の 詩のワークショップに取り組む。異ジャンルとのコラボレーションやトイレ連込み朗読など、独自のリーディングス タイルを展開。01年に「詩業家宣言」を行い、全国で活動をつづける。03年新世界フェスティバルゲートのココルー ムをたちあげ、04年NPO法人こえとことばとこころの部屋設立。「表現と自立と仕事と社会」をテーマに、「ホーム レスの表現活動を応援したり、「仕事について」の対話を重ねる。」表現を通じて「自律と創造力」を活性化する

仮想の抱擁としての空白

だいぶ前に親友の茂木健一郎が、人生における空白の大事さについて語っていた。そうだ。生きていく上で空 白ということの大事さはあまり分かられていない。それは、宮沢賢治のいう「未来圏から吹く風」でもあるし、 空白の弾力のようなものこそが生きる喜びであるからだ。

いそがしいから、たまにある空白がいい。というのではない。僕が思う空白は、たとえば高い建物が並ぶパリ の街角で、その多くの建物が内側にひっそりと隠してる 庭園のようなものである。 騒音とか世の中の有象無 象が背景に後退していくようなそうした感覚が立ち上がる。

唐突であるが、思うに空白がいいのはそれが愛の対極にあるからではないか。恋愛のイメージは、充填であり、 独占であり、独りよがり、である。一方恋愛からその悪いところを取り去ったもの、それが親切心である。親切心 とは相手のない愛、偏在するものへの愛である。そうした親切心こそがアートのテーマであり、歌のテーマであ り、小説のテーマであり、ひいては人生のテーマであるべきなのに、現実では歌や小説のテーマは恋愛ばかり。 みんな、愛にはどん欲で敏感だけど、親切なことは見過ごされがちである。

親切心と愛は、どう違うのか?動物には愛はあるが親切心はないとしよう。だとすると人間を人間たらしめてる のが 親切心である。 親切心は本棚の本を整理したり、 庭を手入れするのに似てる気がするが、 愛は部屋を散ら かしたり、きれいな花を買ってくるような、そういう感じである。

「牛を持ち上げる機械」を使って自分の身体を挟む、すると心が平穏になる、と言う自閉症の大学教授の話をオ リバー・サックスの本で読んで、痛く感動したことがある。この大学教授は、他の人に抱かれたりすることが小さ い頃から堪え難かった。しかし、この牛を農場で移動させるのに使う装置を使うことで、初めてその人にとって 抱擁と同じ安心感が与えられたのだ。仮想の空白としての親切心とは、例えばそういうものである。

親切心とは、その意味で物理学であり数学である。それは、一見感情や意味を担わないものがかえって心を満 たしてくれるということである。それではわれわれはまったく物理的な世界に生きているのか、というとそうで はない。われわれの世界は一通りの仕方では語れないようにできあがっている。そして、まさにそのことにわれ われが置くべき価値が転がっている。



池上高志

東京大学大学院 広域システム科学 助教授 複雑系の研究者。生命とは何か、意識とは何か、をコンピュータを使った 構成論的なアプローチで探っている。



特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋(cocoroom

活動内容:芸術を「生きる術」ととらえ、「表現」を通した自立・自律を育む事業を行ない、社会や地域の問題解決 の力となるよう取り組んでいる。フェスティバルゲートの新世界アーツパーク内で市民交流窓口となるココルー ムを年中無休で運営。積極的にアウトリーチ活動を行ない、それらの情報を発信したり、意見交換をする場をコ コルームにもつ。「表現」を軸に、ニート、ホームレス、障害者など社会的な問題にも取り組んでいる。

事業実績:大阪・紙の芝居劇場(西成の生活保護受給者の表現を通じた自立支援事業)継続中 読歩project(視覚障害者と晴眼者のアートを通じたコミュニケーションづくり)継続中 BOOKS ARCHIVES(視覚障害者など本を読む機会の少ない方に本に親しむ仕組みを作る公開朗読録音事

大阪まちのにぎわいづくり事業 OLUproject 2004年8月~2005年2月 大阪姿座事業「あたたとわた」の間に 2004年8日~2005年3日 野村国際文化財団助成事業「線とことば 2005年4月~2005年8月

<www.kanayo-net.com/cocoroom>

このポスターは第3回大阪・アート・カレイドスコープ<www.doartyourself.jp>において、cocoroom とアトピア・プロジェクトの共同制作により実現したものです。『ぽえ犬通信』の特別号として上田假奈代氏、 池上高志氏、橘安純氏に寄稿を依頼しました。裏面の画像は、橘安純氏が自分で建てた大阪の住まいを図式

2006年6月にアトピア・プロジェクト<www.atopiaprojects.org>が発行した全8枚のポスターのうちの1枚です。 写真及びテキストに関する著作権は、それぞれ寄稿していただいた作家、アーティストに帰属します。 編集・収集に関する著作権はアトピア・プロジェクトに帰属します。 デザイン:グレアム・リンチ <www.gelo.ca>

第3回大阪・アート・カレイドスコープ "do art yourself"

企画・運営:大阪アートNPOコンソーシアム

NPO法人大阪アーツアポリア

應典院寺町倶楽部 特定非営利活動法人キャズ (CAS)

特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋

NPO法人DANCE BOX NPO法人Beyond Innocence (BRIDGE)

NPO法人記録と表現とメディアのための組織 (remo)

NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト (recip) ァの印刷物は第3回 大阪・アート・カレイドスコープ "do art yourself

の開催の機会に、「大阪ポスタープロジェクト」として制作されました。

POEINU JOURNAL ISSUE 20 "The world and the new world"

What I Want to Express (Speak Out) Through My Homeless Life Yasuzumi Tachihana

In 1998, I was in a bad situation and I had to become homeless, whether I wanted to or not. That year, I joined the first sit-in demonstration organized by the people from Kamagasaki Stop-Unemployment Association, which was held against the city hall. During the demonstration period, I started to write poems and texts on a cardboard box telling others why I

I remember that the slogan I used was:

Homeless are not "lazy" fellows they are straight arrows

At the end of 1998, I found a place to sleep under the eaves of Abenobashi Station. Recently, I moved to a shack built inside the park near the zoo, and now I work during the day. I often post my poems, bulletins for the homeless, and anti-war manifestos outside my shack. My life here is calm and peaceful. Therefore, although I do profess to be homeless, I know that I am not the poorest. Compared to the homeless who have to find different places to sleep every day, I feel like I am an aristocrat. There is enough space to lie down and relax in my shack whenever I want, and there is even an extra space to store all my belongings and handouts. I can use a water supply from the public toilet, and when I feel like cooking, I use a portable cooking stove. I basically have no difficulties with this small shack, and I don't feel any weakness for being homeless. I can always enjoy the view of the famous Tsutenkaku Tower from here, and even check the time from the huge clock on the tower. The tower also has an illuminated weather forecast display. Sometimes I can see a flock of flamingos flying across the sky. I believe that I am living in a splendid location, and I do not have to pay rent for my house. However, I do have a fear all the time that once I get kicked out of the park, I will lose everything all at once.

Morning in the park smoke trails out from the woods while cooking the rice Need no help from the government I will build my own shelter without support

Remove our shelter we will rebuild and renovate and have a better life

In my poems, I try not to focus too much on the freedom of the homeless. People support the homeless because they have compassion for their situation. If we express the joy of being homeless, people will definitely get offended. The weak should not say too much, and that is the way it is in our society.

Homo sapiens you are the enemy of us homeless

We sleep to survive that is how we demand for our right to live

I write poems so that people will have a clue about our lives, and better understand the homeless situation.

In spite of a freezing wind I sleep here I have my mates

Home sweet home I stretch out and relax in my cardboard house

Day by day I free myself from shame and sleep on the street

Cold and lonely I miss the feeling being with somebody

However, what is more important for me while I'm writing the poems is to express honest feelings from the point of view of the homeless. I want you to free yourself from common sense in our society, then you will recognize that the homeless have the potential to change our way of living.

A simple life that you don't demand for a richer life

A lifestyle you pick up the waste and never waste the wastes

Save resources and recycle homeless do only good to the mother earth

To be honest, I believe that the homeless are freer than white-collar workers, who cannot run away from a company, home loan, and the responsibilities of society.

Making a relationship with a society through performance

I started to write poems when I was in my youth, and often made collections of my poems. When I was living in a dosshouse district, I wrote about my life as a day worker, and when I became homeless, I started to write about my homeless life.

In 2004, I had an opportunity to perform and read my poems at the event Reading THE BIG ISSUE, organized by Cocoroom in Osaka. Although I had never read my poems in front of so many people before, I accidentally got on the stage. Since then, I often go and see other people's performances, check my favorite performers' stage, and make connections with new people. Now I am in my fifties, but I am burning with the fire of youth.

When I first performed my poems on the stage, I could not even see the audiences' eyes, and I had no idea what they would think about my performance. I never forget the moment that the guests burst into laughter when I bungled my lines. That was the first time I experienced the joy of performing, and this feeling always motivates me to get on the stage again. I used to express my feelings only inside my poetry book, but I was doing that for self-satisfaction, and wanted to avoid

Now I am highly excited to perform in front of people. I look for opportunities to express myself. My new goal is to perform much better than before, so people enjoy the performance more. My desire to perform my poems in front of many people drives me to develop new relationships. Poetry reading is now becoming a bridge to connect me with other people, and it enables me to get involved in society.

However, above all...I am only a very shy homeless person who gets easily embarrassed in front of you.

Yasuzumi Tachibana

<a href="mailto:/hexageon.cool.ne.jp/ikiru/ikiru_index.html">http://hexageon.cool.ne.jp/ikiru/ikiru_index.html | tatibana8@msn.com

Wanted: A poetry reading job.

I live in a self-built shelter in Tennouii Park, Osaka. I recite poems about my homeless life.

Also, I often read my "Stop-war independant" poems in the streets of Osaka

However, I am looking for more opportunities to present my poems

Please spare me some time when you have a gathering or meeting.

If you are interested, please contact:

4F Festival Gate 3-4-36 556-0002 Japan tel 06-6636-1612 | fax 06-6636-1662 <www.kanayo-net.com/cocoroom> | cocoroom@kanayo-net.com

On Expression, Work, and Society (from Osaka Manifesto) Kanayo Ueda

The world is made up of millions of unknown workers.

Some of them wake up in the early morning, have a quick breakfast while they rub the sleep from their eyes, or do not even have enough time to have a quick breakfast, get to their offices and start their routine work, sweat profusely from the physical labor, or have to do lots of brainwork without rest, make documents, complain or be complained to, appreciated, or not appreciated by anybody, cheer each other up, go back home and sleep while somebody else wakes up and heads to work. Our daily life consists of such interconnected labor systems. This continues day after day.

Birth and death come equally to all of us. There might be no answer to such a question as: "Why was I born at a particular time in a particular place?" However, I do know that no one else can live my life. Therefore, I should be proud of my own life. When I try to seek my purpose in life, and wish to do good things for society, I often think about the real meaning of work. We spend a large amount of time working in our lives. For what reason do we go to work everyday? Is it for yourself, or for your family? Is it for your clients and stockholders? Is it for the fame and fortune that you will lose after you die? I believe that the reason I am working everyday is to support the next generation, and make a better society for them.

To live in a society is to have a sense of responsibility in the place where one belongs as an individual. Therefore, we should be involved in society without escaping our duties. However, of course, we should enjoy being ourselves, and try to find the significance of our existence in the community. I want to think seriously about whether the work I am doing now is meaningful enough to hand over to the next generation. I hope that I can share my ideas, work collaboratively, and reconsider the value of life with all the other people who are living in the present time.

I know that what I am trying to do is idealistic. However, I will use all my efforts and creativities to realize my ideal. Creative expression encourages people and brings about new possibilities. And by involving others in the community, we will add strength and harmony to our expressions. I strongly hope that it will connect all of us together, in the near future,

Kanayo Ueda (Fighter Poet, Poetry Promoter)

Born in 1969. Ueda started writing poems at age three, and started reading her poetry at age seventeen. Currently, she is organizing poetry workshops for people with visual impairment, parents and children, adults, and students. She also aims to develop new and progressive poetry reading styles through collaborative performances with different artists, and by holding poetry reading events in unusual spaces such as public restrooms. In 2001, Ueda started to call herself a "Poetry Promoter," and she actively holds a variety of poetry events throughout Japan. In 2003, she founded cocoroom in Shinsekai Festival gate, Osaka; and NPO The Room of the Voice, Words, and the Mind (Coe to Cotoba to Cocoro no Heya) in 2004. Ueda's main concept is always based on topics such as "Expression, Independence, Work, and Society," and she often supports the artistic activities of the homeless, and facilitates discussions with them on various aspects of "labor." Her goal is to develop an independent and creative society through her activities.

Empty Sphere as Virtual Hug

Takashi Ikegami I remember that guite a long time ago, my good friend Kenichirou Mogi explained to me the importance of the empty sphere in one's life. I totally agree with his idea. We tend to overlook the importance of this sphere. This is because we often think, for instance, that the elastic surface of this empty sphere is the factor that gives us joy in life, and that the

empty sphere itself is invisible and unrecognizable—as Kenii Miyazawa (1896-1933), a Japanese poet, says, "The wind

that is blowing from the future." However, I do not think that we should be desperate to find an empty sphere in our lives only because we want to escape from our busy days. I think that an aspect of this emptiness exists naturally in our minds, just as a small garden is quietly situated behind tall apartments in the city of Paris. When you confront a quiet garden in a big city, you experience the feeling that all the noise, din, and bustle of the city are suddenly fading out of your world. That could be the experience

I know this might be an odd idea, but I believe that emptiness is the opposite of love, and that is also its virtue. I must confess that I am a poor talker when it comes to love. For me, the definition of love consists of negative emotions such as strong-desires, possessiveness, and self-centredness. Kindness remains only if you try to exclude the emotions that are driven by love. Kindness may also be equal to emptiness.

Therefore, kindness should be the main subject of the arts, songs, novels, and even our lives. However, everywhere we can see songs and novels that are trying to represent "love." Everybody seems to care about "love," but kindness is

What is the difference between love and kindness? We can say that animals have love, but no emotion such as kindness. Then we can also say that to be human is to have kindness towards others. For instance, carefully arranging books on a bookshelf, or taking good care of the flowers in the garden are acts of kindness, while love is an impulsive emotion which drives you to mess your room, and makes you want to buy beautiful flowers.

I remember that I was really moved by Oliver Sacks' book *An Anthropologist on Mars*, when I read about an autistic professor who only feels secure when she puts her body inside a cattle-holding chute. Since her childhood, the professor had been seized with fears whenever someone tried to hug her. However, when she found the cattle-holding chute, and softly surrounded herself with the machine, she felt as secure as others do when being hugged. This episode perfectly describes my definition of kindness.

Kindness, in a way, has the same structure as math and physics. Having no emotion or meanings, math and physics fill our minds. But this doesn't indicate that we are living in a singularly physical world. If anything, we know that we need a plurality of languages to talk about our world and minds. We should face the fact that more importance and value should be attached to this significant element of our minds.

Ikegami is a researcher of complex systems sciences. He studies the subjects of life and mind through constructive approaches utilizing computer simulations

Associate professor, Department of General Systems Sciences, Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo

Coe to Cotoba to Cocoro no Heya (cocoroom)

By approaching art as a "technique for living," we organize projects that promote independence and autonomy through "expression," and attempt to help solve social and regional problems. As a community center located in the Shin-Sekai Art Park complex, Festival Gate, cocoroom is open every day of the year. We also function to provide outreach services, information about other services, and a place where opinions can be exchanged. We strive to help alleviate social problems related to the young, homeless, and handicapped.

Temporary Projects

Ongoing Projects

▶ Kami no Shihai Gekijo (nicture-card theater: an independent support project designed to help people receiving public assistance in Nishinari express themselves)

Dokuho Project (a project designed to stimulate communication between the blind and

non-blind through art). ▶ Book Archives (a project to give public readings and record books to help the blind and others who have restricted opportunities to read).

▶ OLU Project (The Creating Excitement in Osaka Project), Aug 2004–Feb 2005.

▶ Between You and Me (Osaka Rakuza Project), Aug 2004—Mar 2005. ▶ Lines and Words (Nomura International Culture Foundation Project), Apr—Aug 2005.

<www.kanayo-net.com/cocoroom>

This poster was realized through a collaboration between Atopia Projects and cocoroom, in conjunction with The Third Osaka Art Kaleidoscope <www.doartyourself.jp>. This is a special issue of POEINU Journal containing commissioned content by Kanayo Ueda, Takashi Ikegami, and Yasuzumi Tachibana. The image overleaf diagrams the self-built shelter of Yasuzumi Tachibana in Osaka, Japan.

This poster is one of eight posters published by Atopia Projects <www.atopiaprojects.org> June 2006. Individual images and texts © the respective authors and artists. Editorial matter and collection © Atopia Projects

Design: Grahame Lynch <www.gelo.ca> The Third Osaka Art Kaleidoscope "do art yourself." Organized by Osaka Contemporary Art Center.

Coordinated by the Osaka Art NPO Consortium Beyond Innocence (BRIDGE) Coe to Cotoba to Cocoro no Heya (cocoroom) Contemporary Art and Spirits (CAS)

DANCE BOX Osaka Arts-Aporia Outenin Teramachi Club record, expression and medium organization (remo)

regional culture information and projects (recip) This publication is produced as Osaka Poster Project on the occasion of The Third Osaka Art Kaleidoscope "do art yourself."

